

# 「海の環境にも優しい漁業を」 定置網漁の先導者

さか い みつ お  
酒井 光雄



## 大学で得た宝物

「酒井君、ものごとを動かしていくためには、その裏にしっかりとした人々の役割や、手順（システム）が必要だよ」

酒井光雄さんは、巨理信一教授の言葉にはっとしました。それは、当時、日本に紹介されたばかりの「システム・エンジニアリング」という考え方で、光雄さんは、網元の家に生まれ、小さいころから家の仕事を手伝って育ちました。そして高校を卒業すると、これからの漁業には学問も必要と考え、大学で学んでいたのです。

「何より大切なのは、これまでのやり方にこだわらず、新しいシステムを生み出すように、常に努力することなんだよ」

光雄さんは、宝物を見つけたような興奮を感じました。この考え方は、これからの漁業にも、きっと

これからは、定置網の時代だ！  
漁師にとって働きやすくて便利だし  
環境にもやさしい。  
よし、定置網の研究に取り組もう。

定置網って、知っているかな？ それを研究して、海外にも広めたのが酒井光雄さんなんだ。

光雄さんは、「定置網を営むことは、人を守ることに通ずる」と語ったんだって。

自然の恵みを大切にしたいと考えていたのですね。



酒井光雄さんの三二年表

西暦	年齢	
1941年		氷見市宇波に生まれる
1959年	18歳	県立氷見高校卒業
1964年	23歳	日本大学獣医学部水産学科を卒業し、アメリカやカナダへ渡る
1968年	27歳	大泊の漁場を譲り受ける
1978年	37歳	台湾からの研修生を受け入れる
1984年	43歳	定置網漁法の開発により、第1回「とやま賞」を受賞する ガーナの人々に定置網を指導する
1992年	51歳	日本水難救済会富山県支部長になる
1997年	56歳	亡くなる



アマチュア無線に夢中だった中学生時代の光雄さん。

活かせるはずだ。  
光雄さんは、毎日、巨理先生の家へ出かけて、必死に勉強しました。また、英語の勉強にも力を入れました。  
将来、日本の漁業を海外で広めたいと考えていた光雄さんは、その後4年間、外国人がよく散歩に来る日比谷公園に通い、積極的に外国人と話すことで、英会話力を高めたのです。

これからは定置網漁の時代だ

大学を卒業した後、光雄さんがカナダのバンクーバーの漁村を訪れたときのことです。

「おい、お前は日本人か」  
「そうだ」

「沖に明かりが見えるのは、日本の漁師どもだ。おれたちの目の前まで来て、魚を全部もって行くんだ。お前に、おれたちの気持ち分かるか」

その言葉に、光雄さんは答えることができませんでした。当時の日本では、遠く外国の海まで行き、魚を獲る遠洋漁業がさかんだったのです。

「こんな日本のやり方は、長くは続かない。いずれ、外国の海から追い出されるだろう」

光雄さんは、新しい方法が必要だと感じました。そして、目をつけたのが、定置網漁でした。

実は、酒井家では代々、定置網に取り組んでいたのです。

定置網は、遠くても海岸から4 km以内に設置します。日本沿岸の魚を獲るのだから、外国の人に文句を言われることはありません。



大泊の定置網は、水深80mに側張り全長600m、磯垣網1200m、沖垣網1500mという超大型定置網でした。

また、港から網まで近いため、遠洋漁業のように漁師が何か月も家に帰らないということもありません。「今は、そんなに注目されていないが、きっと定置網の時代が来るはずだ」

光雄さんの予想通り、その後、200海里経済水域が定められ、外国の海での漁が、国際的に制限されました。光雄さんは、自分の考えが正しいことを確信し、定置網に打ち込んでいきました。

「魔の漁場」に挑む

「大泊で大型定置網をやる気はありませんか」  
光雄さんにそんな話が舞い込みました。



## 子どもたちの感想

氷見市立東小学校6年生の  
お友達の感想です。

ぼくは、酒井光雄さんのことを調べていて、酒井さんは仕事一筋の人だということがわかった。定置網のよさに早い時期から気が付き、漁獲量を上げるためにいろいろな工夫をした。また、日本全国いろいろな場所へ出かけ、積極的に定置網のよさを宣伝した。

酒井さんは、ひとつのことに一心不乱に向かっていく人で、イチローも驚く、努力の人だと思う。(山本 純さん)

ぼくは、インタビューに行くと、酒井さんはすごい努力をしてきた人だと思いました。理由は、すごい父親に勝つことを目標に、外国へ勉強しに行ったり、定置網の研究をしたりして、定置網の普及のために努力を続けたからです。(吉滝昇平さん)

お話を聞いた部屋には、定置網に関する写真や本がありました。また、テーブルには定置網の模型があり、さすが定置網に一生をかけた人だと思いました。お話を聞いて、初めて知ったことがありました。それは、外国にも定置網を広げるために努力されたことです。また、定置網にいろいろな工夫をして、魚を生きた状態で保管できるようにしたことなどで、「とやま賞」を受賞されたことも知りました。氷見にこんなにすごい人がいたなんて、びっくりしてしまいました。(田中智也さん)

思わず、光雄さんは考え込みました。光雄さんにとって、独自に大型の定置網をもつことは、大きな夢でした。

しかし、そう簡単には喜べない話なのです。なぜなら、大泊は、誰が定置網を仕かけても強い潮に網を流され、「魔の漁場」と恐れられていたからです。

光雄さんは、大泊の海に潜って、漁場の様子を調べました。想像以上に潮の流れは強く、岩にしがみついていると体が流されそうでしたが、豊かな魚の群れは魅力的でした。

定置網をつまぐ設置すれば、きつとすごい漁獲高になるぞ！

しかし、光雄さんの挑戦に、周りの人々は冷ややかでした。

「大泊に定置網なんて、無理だ」

「どうせ、失敗するに決まっているさ」

それでも光雄さんは、大泊に設置する新しい定置網の設計に取りかかりました。網を引きちぎるほどの激しい流れの「魔の漁場」には、今までの常識を大幅に超える設備が必要だったのです。

夜明けから日が沈むまで、休日なしの過酷な労働が続きました。

「そんなに、無理をして大丈夫か。これでは体がもたんぞ」

光雄さんは、心配する周囲の声にも耳を貸さず、力の限りを尽くしました。

何としても、魔の漁場を克服したい。

光雄さんは、持てる限りの情熱と体力をかけて、近代的な定置網を完成させました。そして、その年には、4億円もの漁獲高を上げたのでした。

## 常に前進あるのみ

大泊での成功は、広く知られるようになりました。「酒井さん、もつと漁獲高が上がるように、網を見てもらえないだろうか」

「私たちの組合で、定置網について講演をしてください」

光雄さんは、そんな問い合わせに応え、日本全国へ、時には海外にまで出かけて、定置網の良さについて説明したり、実際に技術指導したりしました。

いつしか、そんな光雄さんのことを、「定置網の神様」と呼ぶ人さえ出てきました。

しかし、光雄さんは、学生時代に学んだ「システム・エンジニアリング」の考え方を、片時も忘れることはありませんでした。

そして、人工衛星を使った魚群探知機や、魚を傷つけずに移動させる機械を導入するなど、良いと思うことをどんどん取り入れていったのです。

ある日、光雄さんは、アフリカで飢えに苦しむ人

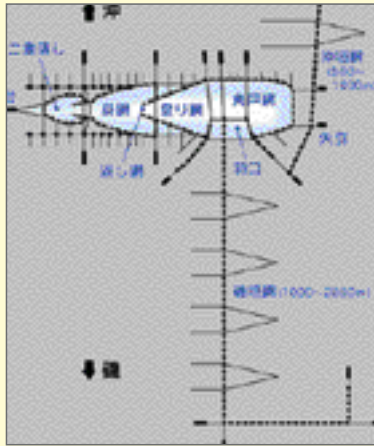


光雄さんは、実際に海に潜って様子を調べ、網にいろいろな工夫を重ねました。



## 定置網のよさとは

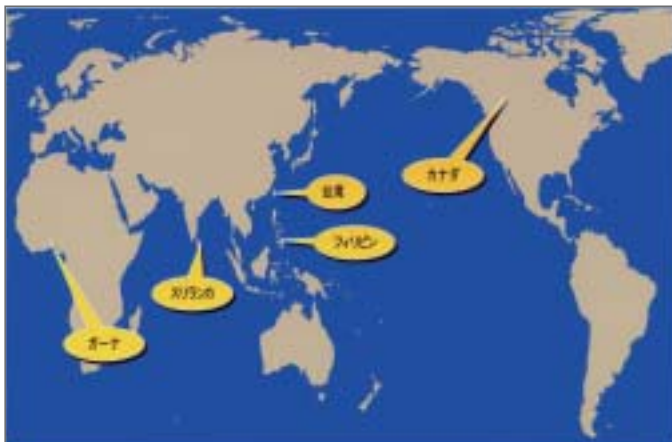
港から近いので、漁船の燃料が少なくすむ。  
とれたての魚を、新鮮なまま市場へ出荷できる。  
泳いでいる魚の10~20%しか獲らないので、  
魚を獲りすぎることがない。  
定置網は、網に魚が卵を産みつけたり、小魚の  
すみかとなったりするため、海を守る役割も果たす。



定置網は、魚が集まってくるポイントに設置し、魚を狭い囲いへと追い込んで獲る漁法です。



氷見市立東小学校6年生のお友達が、酒井さんの家に行って、光雄さんの奥さんの久美子さんからお話を聞きました。



酒井さんが海外協力した地域は、上の地図のようになっています。

定置網は、魚を根こそぎに獲るような漁法じゃないから、海の生態系を守ることもつながるんだね。



光雄さんのまいた種は、着実に芽を出しているんですね。



2003年には「定置網サミット」が氷見市で開かれ、世界各国から人々が集まったんだよ。



取材に出かけた氷見市立東小学校6年の山本純さん、吉滝昇平さん、田中智也さん、川本和希さん、小境大介さん、吉滝光弥さん。(上の写真含む)

酒井光雄さんは、海を大切にしたいと考えていました。次のページで紹介する佐伯宗義さんは、立山の自然と伝統を守るために力を尽くしました。

の様子をテレビで見ました。  
「栄養価の高い魚が海にいっぱいいるのに、飢えて苦しんでいるとは…。そうだ、定置網の技術なら、きつと役に立てるはずだ!」  
光雄さんは、学生時代からの夢の実現に向けて、本格的に動き出しました。  
もっとも大切なことは、定置網をその国に根付かせることだ。そのためには、人材を育てないといけない。  
そう考えた光雄さんは、海外から研修生を受け入れ、熱心に定置網の技術を教えました。  
定置網を愛し、コンピュータを取り入れるなど新しい定置網のために力を尽くした酒井光雄さん。その熱い思いは、息子の光二さんへと受け継がれ、新たな夢の実現に向けて力強く動き出しています。